



# 筑紫女学園大学リポジト

## 750th Memorial for Shinran Shonin and his 'Peace and Tranquility'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗山, 俊之, KURIYAMA, Toshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/129">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/129</a>

# 浄土真宗本願寺派教団と親鸞の「世のなか安穩なれ」

「親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地区法要」を通して (一)

栗 山 俊 之

750th Memorial for Shinran Shonin and his 'Peace and Tranquility'

Toshiyuki KURIYAMA

## はじめに

親鸞没後七五〇年を迎える浄土真宗本願寺派教団は、現在、本山にて二〇二一（平成三三年）四月から翌年一月に修行される「親鸞聖人七五〇回大遠忌法要」に向けて、大谷本廟・直属寺院・一般寺院・組・地方都市における法要を行っている。親鸞の命日を期して毎年行われる報恩講を最も重要な法要と位置付ける教団にとって、五〇年毎に行われる「大遠忌法要」は、それゆえにその総力を挙げて取り組まれるべきものとされてきた。従って、その法要が、何を掲げ、どのような中身を持つのかということとは、その時々々の教団の在り様を端的に示すものでもある。

今回の大遠忌において教団は、「新たな取り組み」として、「地方都市における法要行事」を「大遠忌法要の気運を盛り上げるとともに、そのご勝縁を国内各地に弘めるつえから、地方都市において地域性や

特色を踏まえた法要行事を修行・開催することとし<sup>(1)</sup>た。その「法要行事基本要綱」には、北豊教区・福岡教区・大分教区・佐賀教区・長崎教区・熊本教区・宮崎教区・鹿児島教区・沖縄特区、計二〇三〇カ寺（別院・教堂一三カ寺を含む）を抱える九州・沖縄地区では、福岡教区を中心として福岡市において法要を行うことが明記されていた。

二〇〇六年より七五〇回忌を記念した教区独自の企画を検討していた福岡教区は、この「地方都市における法要行事」の実施指令によって、その方途をこの法要の円成に振り向けざるを得なくなった。福岡教区に所属し、既に教区独自の企画の検討に参画していた筆者は、この「地方都市」福岡「における法要行事」の総務部長として、その企画・運営・実施を統括する役割を担うこととなる。

やがて本山から地方都市法要のテーマを今回の七五〇回大遠忌法要全体のスローガンと同様、親鸞がその消息<sup>(2)</sup>の中で述べている「世のなか安穩なれ」とすべきことが伝えられた。サブテーマは法要の中身に

合わせ、地方独自に決定せよということであった。「安穩」ならざる現代社会の中で、親鸞の「世のなか 安穩なれ」という願いを一人ひとりのものとしつつ如何に生きるのか、そのような意味を込めて「時空を超えて聖人は今…」をサブテーマと決めた。法要の名称は「親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地区法要」とした。実施日時は二〇一〇年五月二十七日、会場は福岡市のマリンメッセ、一万一千人の参加者を見込んでいたし、実際にご参集いただいた。

法要の中身を企画するに当たって、筆者が最初に力説したことは、これまでの大規模な法要の多くがそつであったような、芸能人や歌手、あるいは作家など、著名人を呼んでの娯乐的な、アトラクショナルな要素を取り入れた法要ではなく、多くの課題を抱えながら現代社会を生きるわれわれが親鸞と真正面から向き合つことのできるような法要にすべきであるということであった。経験豊富にして博識な諸先輩を前にしてこのような主張をしたがゆえに不相応な重荷を負つこととなった。

まず、今回の法要に向けた筆者の思いを端的に纏め、次のような親鸞聖人七五〇回大遠忌 九州地区法要趣旨<sup>(1)</sup>を執筆した。

「世のなか安穩なれ」 時空を超えて 聖人は今……  
二〇一一年（平成二三）年、浄土真宗本願寺派では「世のなか安穩なれ」をスローガンとして、親鸞聖人七五〇回大遠忌法要をお勤めいたします。

親鸞聖人が浄土に往生されて七五〇年、「法要をお迎えする私たちは、今、人間が、社会が音をたてて崩れていく、そのような時代を生きています。次から次に噴き出す諸問題、虐待や子殺し・

親殺し、ドメスティックバイオレンス、学校崩壊、いじめ、不可解な少年犯罪、共同体の解体や企業のパラダイム、拡大する格差、政治不信や宗教への嫌悪等々に明らかのように、よかれ悪しかれ、これまでの私たちの生き方を支えてきた家族、学校、地域、企業、国家、宗教などは、あたかもその役割を終えたかのようです。依りどころを無くした人びとは、煩惱をむき出しにして生きる他なく、自分自身や他者を傷つけ、しかもそのことに気付く術さえ失っています。繰り返される戦争、破壊され続ける環境といった地球規模の問題も、そうした私たちのありようと無関係ではないでしょう。まさに私たちは、「安穩」ならざる、「世」の只中を生きているといえましょう。

阿弥陀如来は、時間を超え（無量寿）空間を超え（無量光）ではたらき続け、すべてのものが平等に尊ばれ、救われるべき存在であることを教えて下さいます。そして、そのみ教えに出遇われた親鸞聖人は、「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」と願いながら、人びとにみ教えを伝え、み教えに背を向ける自らと社会の現実に向き合い、九〇年の生涯を歩まれました。

今、親鸞聖人おわしませば、何を、どのようにお説きになるでしょうか。

そして、聖人のみ跡を慕う私たちは今、聖人の願いをどのように受けとめて生きるべきなのでしょう。

この法要を契機に、共に考えたいと思います。

この趣旨に沿った法要の中身についても、筆者の提案、問題提起として法要第一部を親鸞劇と映像で構成することが承認され、われわれ

総務部が担当することとなった。第一部は全三時間の内の七〇分、依頼する劇団についても、当初は前進座も検討したが、遣り取りが容易であることが重要であると考え、福岡教堂近く、唐人町に事務所を構える劇団シヨーマンシップに依頼することにした。この時点で、劇のシナリオは総務部が制作しなければならないことが事実上確定した。

かくして総務部副部長・福岡教区正円寺高石双樹氏、途中から加わっていたいただいた同教区真光寺近藤大氏、同光蓮寺芳村隆法氏と共に、親鸞からの、現在の本願寺教団ひいては現代社会への問題提起としての法要第一部を企画・運営・実施することとなる。字義通り夥しい会議を重ね、法要第一部を親鸞劇・映像・現代劇で構成することが決定し、劇団との打ち合わせや、稽古を見ながらのアドバイス、映像制作のための取材旅行などを経て、第一部が形となり、途中、法要直前まで教団執行部からの内容変更の強要等があったが、何とか法要を終えることができた。

紙幅の都合上、本稿ではまず、われわれが制作した「世のなか安穩なれ 仏法ひろまれ 時空を超えて」と題する法要第一部、親鸞劇・映像・現代劇のうち、親鸞劇・映像のシナリオを掲載したい。そして別稿によって、残った現代劇のシナリオを掲載するとともに、教団が法要のテーマとした親鸞の「世のなか 安穩なれ」と個々の意図との関係を明らかにし、現在の本願寺派教団が抱える課題についても言及したい。

## 一 親鸞<sup>(四)</sup>劇

\* 登場人物

親鸞・恵信尼・覚信尼・僧兵・弟子・農民・民衆・法然<sup>(五)</sup>

第一景 親鸞聖人ご往生

筑紫女学園中学・高校コーラス隊による合唱（正信讚）が聞こえてきて、次第に舞台が明るくなる。

合唱が終わってコーラス隊が退場すると、臨終の親鸞を囲む弟子と、親鸞の娘覚信尼の姿が見える。皆、静かに泣いている。

ナレ 西暦二二六三年、一月一六日。頭北面西右脇に臥したまひて、つひに念仏の息たえおわりぬ。

音楽①（テーマ曲）が入って、ダンサー<sup>(六)</sup>たちが登場し、親鸞と弟子たちを包み込むように舞う。

スクリーンにタイトル『親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地法要「世のなか安穩なれ 仏法ひろまれ」』時空をこえて』の文字が浮かび上がる。

タイトルの中、舞台は次第に薄暗くなる。

第二景 越後の恵信尼

音楽①が遠ざかりかけると吹雪の音。

（照明による）雪が舞う。

続いて、音楽②（吹雪の舞踏）が入り、ダンサーたちが白布を使って舞い踊る。（その中で、親鸞と弟子、覚信尼が白布にかき消されるように退場）

明かりの中に、紙と筆を手にした恵信尼の姿が浮かび上がる。覚信尼からの手紙に返事を書いている姿。

恵信尼（温かく語りかけるように）覚信尼、京都からのあなたのお手紙、確かに読みました。なによりも、お父様が浄土に往生なさったことについてはあらためて申し上げる言葉もありません。

音楽②が遠ざかると共に、ダンサー退場。

明かり、恵信尼のみ。

恵信尼 お父様のご一生は、阿弥陀如来の智慧と慈悲に支えられ、その智慧と慈悲を人々に伝えられた九十年でした。そしてこの恵信尼も妻として、また同じお念仏の同行として、教えをさずかった一人でもありました。しかし、阿弥陀如来の他力念仏のみ教えに出遇われるまでには、長い長い年月をかけた葛藤がおりであったことを、よくお聞かせくださいました。お父さまが出家なさったのは、まだ幼い九歳の時です。

### 第三景 比叡山での葛藤

幼少の頃の親鸞の唄声が聞こえてくる。

スクリーンに、修行のイメージ映像が映し出される。

親鸞（声）♪明日ありと 思つ心のあだ桜 夜半に風の 吹かぬも

のかは♪

恵信尼 九歳で出家して以来、お父さまは覺りを開くために、京都の比叡山で学問を積み、膨大な經典に通じられ、厳しい修行に打ち込まれました。ですが、若き日のお父様は

音楽③（修行僧）が入って全体に明かり。

現れる一人の修行僧、親鸞である。肉体的な疲労たけでなく、心にも何か重いものを背負っている様子。

恵信尼の明かり、消える。

親鸞

ダメだ！…。長年、厳しい修行を行ってきたが、いまだ覺りには近づけない。世俗の世界を離れ、修行に打ち込む生活は、緊張に満ちた清潔なものではあった。しかし、清らかであるうとすればするほど、自分の醜さばかりが見えてくる。これでは『真実』などはほど遠い…。もつと修行を重ねてこの醜い心を断ち切らなければ…。

と、三丁四人の武装した僧兵たちがくる。

音楽③、消える。

僧兵①

（勝ち誇ったように高笑い）あの貴族たちの顔を見たか。いくら身分が高いからといっても、我ら僧兵が仏罰をチラつかせて押しかければ、おびえて手も足も出ない腰抜けばかりだ。

僧兵②

（高笑いしながら）今の京の町では、我らが通れば、みな道を開けて歩く。仏教の經典を学んで知識を蓄え、武器を手にして力を得た我らに、もつ恐れるものなどないにいな。

僧兵③ しかし、一つ厄介な噂を聞いた。

僧兵① 何だ？

僧兵③ …吉水の法然のことよ。

僧兵② あゝの専修念仏のか？！

僧兵③ ああ…あそこに通うものはみな、仏罰を一切恐れない念仏のヘンクツ者になっていくらしい…広まれば…厄介だ。

僧兵② まあ気にするな。所詮、いし、かわら・つぶての如き小さな道場よ。そのうちつぶれる。

僧兵① そんなことより、また、 Paar〜つとやろうや。

僧兵たち、口々に云いながら、親鸞の前を通り過ぎる。

再び音楽③が聞こえてくる。

親鸞

(怒りに震えながら) 仏教を売りものにし、名誉と利益を求めて暴力をふるい、鬭争に明け暮れる世界は、少しも衰えを見せない。自己の欲望を充たそうとして、繰り返される人間の争い、偽善がまかりとおっている世界の真つ只中で、いったい、わたしひとり善行を行ない、浄らかであることができるのだろうか…イヤイヤ、それさえも自己中心のひとりよがりではないのか…

振り払つように、再び修行を始める親鸞。お経を唱え

ながら歩き回る、

常行三昧。

音楽③、遠ざかる。

恵信尼に明かり。

以下の台詞の中で、戦乱をイメージさせるスクリーン

映像が映し出される。

恵信尼

その頃は、朝廷の役人や武士たちによる二重三重の年貢の取立てに加え、頻発する戦乱や飢饉にその日その日の生活を脅かされながら、多くの人々が苦しい生活を送っておりました。

音楽④(煩惱)が入る。

鍬を担いでふらふらと現れる農民。親鸞にすがり付くように跪いて倒れる。

次々と民衆が出て、我先にと親鸞にすがりつく。

赤い布を手にしたダンサーたちが登場し、民衆を振り

払うように舞う。(民衆の苦しみと、うずまく人間の

煩惱のイメージの舞踏)

親鸞

ああ…(絶望的な嘆息) 私がどれだけ精進や努力をしようとして、私を取り巻く世界は少しも善くはならない…。このようになむない修行がまことの覚りへの菩薩道と呼ぶに値するのであるのか。暴力を止めさせることは出来なくとも、虐げられている人々の助けとなるようなことができないのか？

以下の台詞の中で、音楽④が遠ざかっていくと共に、

ダンサーたちに追いやられるように民衆は消えてい

く。

明かりも、親鸞のみに。

親鸞

汚れ濁った世界から離れて浄らかになろうとすればするほど、自分の殻に閉じこもることになってしまつ。仮にこの

先厳しい修行でわたし自身が覚りを開くことができても、わたしの生活を支えている民衆は、ついに救われることがない。(求めても得られない、もどかしさに)まことの菩薩道は、いったいどこにあるのか!

暗転。

第四景 『自力』から『他力』へ

恵信尼に明かり。

以下の台詞に合わせて、スクリーンに、六角堂・聖徳太子・法然坐像が映し出される。

恵信尼 お父さまは、比叡山を降りて六角堂に百日間こもられました。救いを求めて祈っておられたところ、九十五日の明け方に、夢の中に観音さまが現れてお言葉をお示しく下さいました。お父さまはすぐに六角堂を出て、法然上人をお訪ねになりました。

音楽⑤(法然)が入る。

舞台中央に、法然上人の姿が浮かび上がる。

法然の元へ向う親鸞。

恵信尼 そこでもまた、百日間、雨の降る日も風の日も法然上人のもとにお通いになりました。そして、他力念仏の教えをしつかりと受けとめられるに至りました。

膝をつき合わせて語り合う法然と親鸞。(身を乗り出す親鸞、受け止める法然)

恵信尼明かり、消える。

親鸞

私はいくら修行しても、次から次へと迷いの心が沸いてきてしまいます。もし仮にわたしが厳しい修行で救われるとしても、民衆すべてが救われることなどありません。

法然

…(静かに頷き、親鸞の気持ちを受け止める)

親鸞

道を真剣に求めれば求めるだけ、煩惱を離れてまことの自己の完成を期待すればそれだけ、絶望的にならざるをえないのです…。

法然

あなたのその苦悩は、まことに尊いものです。よくそこまで修行なされましたね。

親鸞

…?(法然の言葉がすぐには理解出来ない)

法然

音楽⑤、消える。

親鸞

あなたが修行して、あなたひとりが救われても、民衆すべては救われぬ。そのことを『苦悩』に感じるあなたの心は、いったいどこから起こつてくると思えますか? …?

法然

それは、自らの力で覚りを開き、救いを獲得しようとしているからです。あなたの苦悩の根源は、実は自分の力に対する執着心にあるのではないですか?自力の行を捨て、他力の念仏にお任せすることです。もうすでに、『すべてのものが救われなければならない』という阿弥陀如来の本願、浄土の菩提心が、あなたに至り届いてではありませんか。(静かに笑みを浮かべながら)それは、まことに尊いものです。

親鸞

…!

音楽⑥（目覚め）が入る。

法然

（勢いよく、且つ力強く）よいですか。阿弥陀如来は一切の生きとし生けるものを等しく救うために、念仏という誰にでもできることを本願となさつたのです。もしも大きな仏像や大きなお堂を建立しなければ救われないのであれば、大多数の貧しい人々は救われることがない。もしも特定の資格や高い才能が無ければ救われないのであれば、それを持ち合わせない人々は救われることがない。もしも知識や経験を積まなければ救われないのであれば、それができない人々は救われることがない。阿弥陀如来は一切を救い取るために、ただ称名念仏一つをとって、その本願とお示しくださつたのです。あなたにも間違ひなく、阿弥陀如来の本願が、摂取の光が届いているのです。

親鸞

ああ……なんと！（立ち上がり前に向き直つて、天を仰ぐ）音楽が盛り上がつて、眩いばかりの光に包まれる親鸞。

親鸞

（一切の迷いが消え、力強く宣言）しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の曆、雜行を棄てて本願に帰す！

法然も立ち上がり、親鸞と共に手を合わせ、念仏を称える。

恵信尼に明かり。

恵信尼

闇が深ければ深いほど、阿弥陀如来の摂取の光は輝きを増します。同じ様に、親鸞様の葛藤が深ければ深いほど、法然様との出遇いが、いよいよ輝きに満ち溢れていたの

す。そして、そのようなお父さまとの出遇いによって、この私もまた、救われました

明かり、恵信尼を残して、溶暗。

第五景

信の立場（承元の法難、関東布教へ）

音楽⑦（本願力）が入つて、スクリーンに『一二〇七

年「承元の法難」法然は土佐へ。親鸞は越後へ流罪。

安樂、住蓮らは死罪。主上臣下、法に背き義に違ひ、

怒りを成し怨みを結ぶ……』の文字が浮かび上がる。

恵信尼

（語りかけるように）越後への流罪、関東での布教……

お父さまは、どんなことがあつても、如来の救いを信じ、

喜んでおられました。

舞台に明かり。

民衆に（農民・武士など）に語り聞かせる親鸞の姿。

（各ブロックへ親鸞自らが動きながら）

親鸞

自力とは、自分自身をたよりとし、自分の心をたよる人のことをいふのです。自分の力ではげみ、自分でさまざま善を行うことができると思つている人のことをいふのです。（移動して、次の民衆に）

廻心とは、自分の力を過信しているところをひるがえして、振り捨てることを言つたのです。（移動して）

他力とは、「みんなが救われて欲しい」という阿弥陀如来の本願力のことです（また次の場所へと移動する）

本願をたよりとする人は、みな将来、仏さまになる仲間と



して尊びあつ生き方ができるようになるのです。娑婆の縁つきるまで、罪悪深重の身にかわりはありませんが、その生き方の尊さにおいて、「如来とひとしい」とさえいえるのです。

明かり、恵信尼を残して、溶暗。

音楽、遠ざかる。

## 第六景 三部経千回誦誦

恵信尼 ……ですが、真実に生きようとすればする程、この現実世界ではそれがどれ程難しいことを、思い知らされる日々でもありました。ある酷い飢饉の年

音楽⑧（飢饉）が入り、助けを求める人々が次々と出てくる。中には、倒れ死んでいく者もいる。

恵信尼 飢えに苦しむたくさんの人々、道ばたには死体がごろごろ転がり、亡くなった母親にしがみついて離れようとしない、幼児の泣き叫ぶ声が響きました。

ダンサーたちが（黒布・赤布を手に）登場し、苦しむ民衆たちを呑み込んでいくように舞う。

親鸞が出てきて、ただひたすらに三部経を読む。声を張っても、張っても、舞踏と布の動きは治まらない。

と、親鸞、三部経を読むのをピタリと止める。

音楽も止み、民衆もダンサーたちの動きも止む。まるで時間が止まったかの如き静寂

親鸞 （苦悶の表情。意を決したように）無力だ。自ら他力の教

えを信じ、人に教えて信じてもらうことは、難しいことの中でもさらに難しい。しかしそれこそが『すべてのものを救う』と誓っておられる如来のご恩に報いること。お念仏以外に、わたしには何の不足もない。

再び音楽が湧き上がって、ダンサーたちも動き始める。ゆっくりと確実に人々を呑み込んでいく姿。

以下の台詞の中で、親鸞を残して、辺りは次第に暗くなる。

ダンサーと民衆たち、消えていく。  
音楽も遠ざかっていく。

親鸞 生命あるもの全ての幸福を願うことこそ、阿弥陀如来がわれらに与えられた心、それこそ真の菩提心・大慈悲心であるはずなのだ。

音楽①（テーマ曲）が入って、親鸞に幾つもの光が射す。

阿弥陀如来の御絵像が浮かぶ。

親鸞、和讃が自然と湧きあがって  
親鸞、和讃が自然と湧きあがって  
如来の回向に帰入して 願作仏心をつるひとは 自力の回向をすてはてて 利益有情はきはもなし

親鸞、念仏を称えながら、未来へ希望を繋ぐように力強く客席側へと歩いていく。

その後を、ダンサーたちが続く。

恵信尼に明かり。

以下の台詞の中で、恵信尼を残して、溶暗。

親鸞、退場。ダンサーたちは残る。

惠信尼 越後・関東と渡っていく中で、文字を読むことも出来ない、その日暮らしを送る人々…、そのようなところにこそ、『誰一人もらず救う』という阿弥陀如来の本願が届いていると、お父様は確信されていたのです。

音楽①、遠ざかる。

惠信尼 (母の優しい口調に戻って) 覚信尼、お父さまは最後まで、そつした人々と同じ立場に立ち、共にお念仏の人生を歩まれました。如来の本願が、あらゆる人々を、そして自身を、かけがえのない「いのち」に変えてくださると、心から喜ばれたのですよ。安穩なる世の中の実現を願いつづけて生きよとする苦難を経験して、はじめてひとりひとりの人間のなかにみ仏の慈悲を見出すのです。そうして

音楽①、再び。

阿弥陀如来の御絵像。

惠信尼 おのずとわきあがってくる、命あるものへの尊敬のこころ、自覚こそが、まさしく阿弥陀如来の摂取の光が、すべての人に至りとどいている、ということの証なのです。

溶暗。

## 第七景 未来への希望

舞台は第一景の臨終の場に戻っている。

親鸞聖人の床を囲む覚信尼ら。誰もが悲しみにくれている。

と、舞台奥からドライアイス。その中に、生前の親鸞の姿。

親鸞

れふし・あき人・さまさまのものは、みな、いし、かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。すなはちれふし、あき人などは、いし・かはら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとしとたとへたまへるなり。摂取のひかりと申すは、阿弥陀仏の御ごころにをさめとりたまふゆゑなり。

音楽、盛り上がる。

臨終に立ち会う人々、ダンサーたち、自然に手を合わせて念仏を称える。

手紙を書き終える惠信尼の姿も見える。

惠信尼

親鸞様、わたしも間もなく、あなたさまと同じお浄土に参ります。あなた様が遣された願いは、きつと、後世にも伝わり、多くの人々を救っていくに違いありません。きつと、必ずや…。

惠信尼も念仏の声に加わる。

音楽は遠ざかり、念仏だけが残る。

念仏の中、次第に親鸞の明かりが落ちて、姿が消えていく。

筑女コーラス隊が、(旅行く親鸞)を合唱しながら登場。

出演者一同、大合唱。

親鸞劇編 終演。

二 映像

画面（ ）内は秒数	主題
本山阿弥陀堂（一六）	本願寺
御室内（一一）	音声（太字はテロップとして画面に表示）
点灯（二〇）	* 朝六時。今日も京都・本願寺では仏恩報謝のお勤めが、厳かに始まります。
門徒（一一） 聖人御真影（一一）	* 御堂の裏で数百年に亘って燃え続ける常夜灯。 * 親鸞聖人の御跡を慕う御同朋・御同行の手で、守り続けられてきた灯火です。
外陣（二二）	* 二〇一一年、平成二三年四月より、本山では親鸞聖人七五〇回大遠忌法要が勤められます。 * 聖人が遺された願い「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」。そこに込められた深い意味を、私たち一人ひとりが受け止め、伝えていかねばなりません。
日本地図CG（四四）	* 浄土真宗とは、いのちあるすべてのものが、阿弥陀如来の智慧と慈悲に照らされた御同朋であることを知らされていくみ教えです。 * ここ九州には、八つの教区と沖縄県宗務特別区があります。各地の別院や教堂を中心に、合わせて二千を超える寺院が手を取り合い、み教えを護ってきました。
教区取組写真CG （二二）	* その歩みは、現実を生きる一人ひとりの苦悩に共感し、寄り添い、いのちの尊厳を脅かす様々な

人々の波（二七） 「安穩」テロップ 戦争などの写真CG （二二）	問題にも向き合っていこうとするものです。 * しかしいま、私たちの社会は混乱を深めています。 * 「世のなか安穩なれ」という願いとは裏腹に、いのちが軽んじられ、生きる方向を見失った人々がさまよう時代。 * 周りには、人間が作り出す戦争や貧困、差別といった問題が、解決されないまま横たわっているのが現実です。
小学校の児童たち 軍用ヘリ（六） （一八） 軍用機（二二） 沖縄戦資料（三〇）	* 基地の街、沖縄。 * 今日も子どもたちの頭上を、軍用機が飛び交っています。 * かつてこの地では、多くの人びとの血が流されました。 * 太平洋戦争末期、沖縄は激しい地上戦の舞台となります。 死者は二十万人を超え、その半数近くが民間人だと言われています。
チビチリガマ（九）	* 武器を持たない人びとは、「ガマ」と呼ばれる洞窟に逃げ込むしかありませんでした。 * 「ここからくぐっていきます。一四〇名が二〇日近く、ここで生活をしました。」 * 沖縄中部、読谷村にあるチビチリガマです。ここに逃げ込んだ一四〇名のうち、八四名が命を落と

<p>櫛や骨(三三)</p> <p>ガマ知花さん (三三)</p> <p>語りを聞く母 赤ちゃん(二三)</p> <p>校庭の子どもたち 見上げるとへり (七)</p> <p>「安穩」テロップ (一七)</p> <p>列車車窓(一四)</p>	<p>鹿児島</p>	<p>しました。</p> <p>*住民たちは、「アメリカ軍の捕虜になれば、無惨な殺され方をする」と、教えられていました。暗闇の中で追い詰められた人びとが取った行動は、お互いを殺し合う、いわゆる「集団自決」でした。</p> <p>*「茶色いのはみんな骨です。」</p> <p>*「その中に上地春さんという女性がいたんです、一八歳。この人がお母さんにですね、「お母さん私を殺して」ということで、首を向けていくんです。お母さんも、「自分の年頃のかわいい娘が捕まって強姦されて殺されるよりは一緒に死のう」ということで、娘の首を家から持ってきた包丁で刺しています。それを見た人たち、血しぶきを浴びた人たちが次から次へと、「もう終わりだ」ということで自決に入るんです。自分の産んだ子どもを包丁や鎌やナイフで刺し殺している。何であんなことができたんだろうか。不思議でならないんですね。」</p> <p>*今も残る戦争の記憶。</p> <p>*目の前から戦争が無くなれば、私たちはそれを「安穩」と呼べるのでしょうか。</p> <p>*鹿児島県鹿屋市。ここに、ハンセン病の療養施設があります。</p>
---	------------	---

<p>注射写真(七)</p> <p>敬愛園写真(一〇)</p> <p>記念撮影写真(九)</p> <p>牛舎前写真(一〇)</p> <p>上野政行さん(一四)</p> <p>「上野政行」テロップ</p> <p>阿弥陀如来像(一一)</p> <p>上野さんにズーム (三三)</p> <p>上野さん(二九)</p>	<p>*明治時代以降、ハンセン病患者は国の法律によって、ふるさとや家族から強制的に引き離され、隔離されてきました。</p> <p>*患者が子どもを授からないよう、断種や墮胎の手術が行われていたこともあります。</p> <p>*国による隔離政策は、平成八年まで続いていました。</p> <p>*「療養所の中で火葬場があつてですね、煙がモクモクと、私たちは「今日はああ誰か死んだんだな」と。私たちは死んで煙にならないと外に出ることはできないとね、うたった人もありますね。」</p> <p>*施設の中には、阿弥陀如来像が安置されています。閉じ込められた暮らしの中で、患者たちは、「どんな者も分け隔てなく救う」という、弥陀の本願にすがっていったのです。</p> <p>*上野政行さんはこれまで、千人近くのにぼる患者の葬儀を、僧侶に代わって執り行ってきました。</p> <p>*仲間たちは社会から抹殺されたまま、亡くなっていきました。</p> <p>*「ここで一生を過ごさなくちゃならない、ここで命を終わらなくちゃならないという私たち自らのですね、自らの救いを求めた形なんです。深海の魚族は、本当に何百メートル下の太陽の光もない真つ暗な世界ですけども、そこ</p>
--	---

<p>列車車窓(一四) 「安穩」テロップ</p>	<p>に住む魚は自ら灯火をともして生きておるんですね。その中でやっぱり私たちの救いは、弥陀の本願だなど、仏さんの本当の願いなんだと。」 *目の前から差別が無くなれば、私たちはそれを「安穩」と呼べるのでしょうか。</p>
<p>水俣の風景(一一) チツソ正門(七) 煙突(一一) 水俣病患者資料 (二九)</p>	<p>熊本 *熊本県水俣市。かつて日本最大の化学工場だったチツソ水俣工場がある町です。 *ここでは、私たちの暮らしに欠かせない、プラスチック製品の原料などが作られてきました。 *昭和三〇年代、未曾有の公害病・水俣病が発生します。原因は、チツソの工場から排出される有機水銀による魚類の汚染でした。それまで豊かな海の恵みで暮らしてきた人びとが、次々と罹患していったのです。</p>
<p>緒方正人さん(一三) 「緒方正人」テロップ 緒方正さんの父の写真 (一一) 緒方さん(三)</p>	<p>*「小さい時からチツソへの怨みがものすごく強かったんですよ。六歳になったばっかしの時におやじが激症の水俣病で苦しんで、狂って狂ってそれこそ死んだもんだから。毎日見ていて考えさせられたのですね、何か自分でできることはないか、だったんですよ。」 *患者やその家族たちは立ち上がります。</p>

<p>患者闘争資料(二六) 船着き場(一四)</p>	<p>*「おらの命が欲しい、子どもの命が欲しい、体が欲しい。あの子の言うことがわかっとですか!」 *国や県・チツソを相手どり、公害を引き起したことを、それを放置してきたことへの責任を問う、裁判を起していったのです。 *父親を亡くした緒方正人さん。緒方さんはある時、こうした裁判闘争から身を引きました。</p>
<p>緒方さんの船(一七)</p>	<p>*化学製品に囲まれて暮らす現代社会の一員として、自分もまた、毒を垂れ流したチツソの社員と同じ罪を負っているのではないかと、考えるようになったのです。 *「よく考えてみたら決して同じことを自分がしなかったとは言えない。ほとんど同じことをした可能性が強い。信を置くべき生命世界・あるいは海・生き物たちの世界に、その罪深さに気づいてくれれば。そのことが一番、この事件・歴史の大きな願いだと思う。いのちの願いというのには、我々がチツソを含めてその罪深さに気づくこと。それはおそらく何人に対しても向けられている課題のはたらきであり、力というか、だと思っんですね。」</p>
<p>胎児性患者資料 (一六)</p>	<p>豊かな暮らしと引き替えに作り出された毒は、母親の胎内に宿った新しい「いのち」にまで、影響を及ぼしました。</p>

<p>ほっとはうす(一四)</p> <p>作業(一六)</p> <p>笑顔(一五)</p> <p>「安穩」テロップ</p> <p>聖人像(一九)</p> <p>「安穩」(一八)</p> <p>「安穩」テロップ</p> <p>現代劇(三〇)</p> <p>現代劇の登場人物、佐野秀之の帰福の様子</p>	<p>安穩</p>	<p>* あれから半世紀。水俣市内にある授産施設「ほっとはうす」です。</p> <p>* 障害を持って生まれてきた胎児性水俣病の患者さんたちも、すでに五〇歳を超えています。</p> <p>* 豊かで便利な生活が実現すれば、私たちはそれを「安穩」と呼べるのでしょうか。</p> <p>* 本当の「安穩」とは何か。親鸞聖人の願いがいま、私たち一人ひとりに、問いかけてきます。</p> <p>現代劇へ</p>
--	-----------	---

## おわりに

「はじめに」において述べたように、これらのシナリオは、今、わが教団が安穩を掲げることの意味を、その根底から問いたいという思いのもと制作したものである。与えられた紙幅の都合上、現代劇のシナリオや、劇や映像の個々の意図が那边にあったのか、またそれが、現在の浄土真宗本願寺派教団が抱える諸課題のどのような部分に焦点を当てたものであったのか等、別稿において詳述したい。

## 註

- (一) 「親鸞聖人七五〇回大遠忌法要行事基本要綱」二〇〇七年二月 親鸞聖人七五〇回大遠忌法要事務所法要庶務部。
- (二) 「親鸞聖人御消息」二五(『浄土真宗聖典(註釈版)』七八四頁)。
- (三) 「親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地区法要パンフレット」六頁。
- (四) 演出は劇団ショーマンシップ付、市岡洋。
- (五) 親鸞役、仲谷一志。恵信尼役、原岡梨絵子。覚信尼、長尾知美。僧兵役、①小河祐毅・②山口泰弘・③吉原直樹。弟子・農民・民衆役、①小河祐毅・②大嶋光男・③山口泰弘・④中野隆・⑤寺崎索・⑥栗野直樹・⑦渋谷沙里季・⑧吉原直樹・⑨別所淳子。法然役、山本一義。
- (六) 近藤勇人、山浦奈美、他、ニューバランスダンサーの方々。

(くりやま としゆき・現代教養学科 准教授)